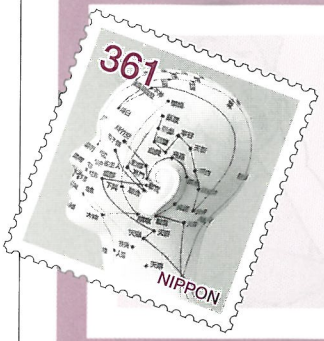

「第二次日本経穴委員会」便り

～第34回　模式図作成における試行錯誤！～

第二次日本経穴委員会・作業部委員　河原保裕（かわはらやすひろ）

つくば会議後

昨年11月に開催されたWHO公式会議（つくば会議）以降、当委員会の作業部会は8回の会議を行っているが、現在行われている作業内容について紹介する。

公式会議終了後、まずは3つの目的をもって会議を重ねてきた。

一つは公式会議において経穴部位は英文で合意形成が行われたが、その議事録を始めとする英文表記のチェックと、英文で決定された経穴部位を忠実に日本語に訳する作業である。以前にも紹介しているが、合宿を何度も行い、明けても暮れても翻訳作業の毎日であった。ここでの作業は公式英文に習い、まず逐語訳し、解剖用語（ガイドライン）に則って表記を行う作業であった。

二つ目は、3月31日に開催された第二次日本経穴委員会の運営団体や学校教員を対象として行われたWHO国際標準経穴部位の報告会である。事前予約での報告会であったが、大きな反響で参加者が予想を上回り、直前になって会場変更を余儀なくされる事態となった。報告会では、つくば会議で決定された経穴の中で、従来日本で採用してきた経穴部位と大きく異なる経穴を中心に報告させて頂いた。また普及の問題として、教育において教科書に採用するかどうか、また採用するのであればその時期はいつからなのかを含めた意見交換も行われ、今後は学校協会・理教連の教科書編纂委員会の方々との話し合いを行っていく予定である。

最後の一つは、現在進行中の作業だが、WHOの刊行する出版物の日本語版に掲載する模式図の作成である。模式図は原則一穴一図で作成する予定である。模式図にはすべて骨を入れ込む予定であり、経穴部位表記に記載されている解剖（筋、血管等）も記載されることが決定されている。また流注の並びで掲載経穴の前後の経穴や、(注)で横の並び等で紹介されている経穴も模式図に入れ込む予定である。

模式図作成過程

模式図は、まず正確な解剖図が必要であるため、経穴記載に対し望ましいと思われる体位・肢位での解剖学的模式図の作成をプロのイラストレーターへ依頼することになった。模式図を依頼するにあたって、最初に取り決めたものは以下の4点であった。

(1)模式図は黒と赤の2色刷りとし、黒と赤のグラデーションを駆使して色のバリエーションを増やし、ストライプ模様は使用しない。

(2)骨と筋の重なり、筋と筋の重なりの部分が

はっきりと表現できるようにする。
(3)肢体は片側、頭部・顔面部・体幹部に関しては原則として両側が表現され、右半身に解剖図を入れ込む。たたし、側面からの模式図に関しては右側のみとする。
(4)分かる範囲内で経穴を入れ込んでおく。

以上の内容で模式図を依頼し、でき上がってきた模式図を、解剖学的視点からチェックする作業を行った。最初にでき上がってきた模式図を見て感じたことは、ぎこちなさである。まず、参考にしているいくつかの解剖学書の挿図は人体の構造を説明するために書かれているので、比率などが必ずしも正確ではないし、我々が必要とする姿位や角度で描かれているものが少ないという事情がある。それに加えてイラストを作成していただいているイラストレーターは解剖や経穴に精通していないため、解剖の骨の形状や筋・血管の走行が実際と異なっていたり、解剖図と経穴を示すポイントが全然一致していなかったりするのである。

模式図を確認するために多くの解剖図を参照したが、出版社や解剖書を監修した先生によって随分と図譜が異なっていることが大きな問題となった。また、検討会議でいつも議題になるのが、関節間隙の広さ、筋の太さや走行位置、また腱の太さや付着部などである。時には、解剖専門の先生にご意見を伺い、委員会とイラストレーターが試行錯誤を重ねながら、なんとか一穴一図に対応する図の形が見え始めてきた。

また各パーツの模式図ができてくると、一穴の模式図では問題ないが、他の模式図と比べた時に問題はないかなどの整合性を確認する作業も行ってきた。過日、全日本鍼灸学会岡山大会が開催されたが、その期間中も日中は学会発表に追われ、夜は作業部会会議を行うという過密なものであった。

現在は９割方完成している模式図に、各自が担当する経穴を入れ込み、その位置が決定された内容と一致しているか確認作業を行っている。これらが完成すると各部位を合わせた全体解剖図（前面、後面、側面）を作成する予定である。７月中に完成を目指しているので、この原稿が掲載される頃には、イラスト作成を終え次の作業に取り掛かっていることであろう。

模式図に経穴を入れて整合性を確認していく上で、新たな確認事項もいくつか出てきている。例えば、その一つは中府（LU1）穴における「雲門の下１寸」である。英文では１B-cunとあり骨度における１寸を表しているが、この骨度はどこを基準とした１寸なのか？　その根拠が明らかではない。前胸部において縦のラインで骨度の取り決めをしているのは「頚切痕～剣状突起軟骨結合部：９骨度寸」のみである。従来は胸骨柄の高さを２寸とし、その半分の高さという事で理解されてきたと思われるが、その記載はどこにもない。同身寸法のF-cunなのか？

各国で共通認識を持つためにも、次回の統一経穴の見直しの時に確認しなければならないと考えている。

経穴の読み

WHO出版物の日本語版作成にあたり、日本語で掲載される経穴の読みも考慮しなければならない。現在、浦山委員から経穴の読みに対しての意見・資料を提出して頂いているが、模式図の作成が完了した時点で、早急に取り組まなければならない作業である。

作業部会委員は、まだまだ休む暇がなさそうである。

（〒330-0802　さいたま市大宮区宮町2-3-1
第２大矢部ビル２F　アコール鍼灸治療院）